

《楽曲解説》

解説=船木 篤也

1/21 第98回オペラシティ定期シリーズ

モーツァルト (1756-1791) 交響曲第33番 変口長調 K.319

- I. アレグロ・アッサイ(約7分)
- II. アンダンテ・モデラート(約5分)
- III. メヌエット-トリオ(約3分)
- IV. アレグロ・アッサイ(約5分)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの全生涯は、しばしばザルツブルク時代と、1781年以降のウィーン時代とに分けられる。交響曲で有名なのは、圧倒的にウィーン時代のもの、すなわち第35番『ハフナー』以降だが、どうして、それ以前の作も捨てがたい。

これから聴く第33番は、ザルツブルク時代の交響曲の最後から2番目にあたえる。書かれたのは1779年。ウィーン時代の、とくに晩年の大規模な3大交響曲(第39番、第40番、第41番)と大きく異なるのは、この頃の「交響曲」の位置づけの微妙さがみて取れる点だ。

当時、交響曲(Sinfonia)はまだ、オペラの開始まえに祝典的な気分を盛り上げるために置く序曲Overtureと、いわば交換可能な存在であった。急-緩-急の構成で書かれた管弦楽曲がオペラの前演奏されることもあれば、そのままコンサートに持ち込まれることもあったので

ある。

急-緩-急の構成は、一続きになっている場合もあるが、それがそのまま3つの楽章を成すこともある。この第33番も、当初はそうように書かれていた。緩徐楽章と最後の急速な楽章のあいだにメヌエットなど舞曲系の楽章を置かないのは、当時のザルツブルクの趣味に合わせたもの。しかしモーツァルトは、1785年、のちウィーンに移ってから本作用に新たにメヌエット楽章を書いている。今日ではこれも加えて4楽章構成で演奏するのが普通だ。

オーボエ、ファゴット、ホルンがそれぞれ2本、あとは弦楽のみという編成も、いかにもこの時代の交響曲らしい。ティンパニとトランペット、あるいはクラリネットといった楽器が響きの重要な部分になう後期の交響曲と比べると、軽く簡素な響きがする。また技巧的にみれば、とくに高度なものではない。しかしそれは、意識的な、いわば「創意に賭けた平易さ」であった。このことは、モーツァルトに忠告する父、レーオポルトの次の手紙からもよく分かるだろう。

「小さなものでも、もしそれが自然で流れ

るように、しかも楽々と書かれ、しっかりと作曲されていれば偉大なのです。そうするのは、大多数の人にはちんぷんかんぷんな技巧的和声進行や演奏するのも困難な旋律などよりむしろかしいのです」

(海老沢敏・高橋英郎訳)

朗らかな楽想、意外性がたのしい強弱法など、本作に魅せられ、愛奏する人——往年の人気指揮者、カルロス・クライバーもそうだった——は多い。

第1楽章 アレグロ・アッサイ、変口長調、3/4拍子 「提示部」「展開部」「提示部の再現部」の構成からなるソナタ形式による。展開部でなんども耳にする、提示部にはなかった旋律は、モーツァルト最後の交響曲、第41番「ジュピター」終楽章の主題とそっくり。これは第2楽章と第

3楽章にも垣間みられる。

第2楽章 アンダンテ・モデラート、変口長調、2/4拍子 これもソナタ形式による。提示部の第1主題、第2主題が、再現部では第2主題、第1主題の順で出てくる。

第3楽章 メヌエット-トリオ、変口長調、3/4拍子 「メヌエット」はがんらい宮廷舞踊で、「ちいさなステップ」の意。全体は「メヌエット」「トリオ(挿入部)」「メヌエットの反復」からなる3部形式。

第4楽章 アレグロ・アッサイ、変口長調、2/4拍子 早口ことばのような3連符の連続が面白い。オーボエとファゴットと一緒に奏する楽句も、コミカル。なにやら喜劇的オペラのよう。

[楽器編成] オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦楽5部

マーラー (1860-1911)

交響曲第4番 ト長調

- I. 落ち着いて。急がずに。本当にくつろいだ感じで。(約17分)
- II. くつろいだ動きで。せかせかせしないで。(約10分)
- III. 安らぎに満ちて。(約18分)
- IV. きわめて心地よく。(約9分)

作曲家グスタフ・マーラーは、職業指揮者でもあったが、自作をつねに自分で演奏したわけではない。1903年、第4交響曲がデュッセルドルフで再演された際(初演は1901年ミュンヘンで、作曲者自身の指揮による)にはユリウス・ブーツという人が振っており、マーラーは彼に宛ててこう書いている。

「これまでの経験からいえることですが、最も上質な聴き手でさえ、この種のフモア(それは冗談や上機嫌というものはまた違うものでしょう)を、えてして正しく見きわめられないものです」

だからこの曲に込められたフモアをしっかりと表現してくださいよ、というわけだが、「フモア」とはいったい何か? 英語でいうユーモアとは違うのか?

これは、マーラーが愛読したドイツ・ロマン派の作家、ジャン・パウル(1763-1825)から受け継いだ概念とみてよい。彼の著した『美学入門』に、こんな一節が

ある。

「フモアは、偉大なものを虚仮(こけ)にする。ただし——パロディと違って——卑小なものや並べてみるのが目的だ。フモアはまた、卑小なものを高めてみせる。ただし——アイロニーと違って——偉大なものと並べてみるのが目的だ。そうして結局、どちらもが無効となる。永遠の前では、すべては同じで、無にほかならないからだ」。

とるにたらぬ事とすごい事。笑いと悲しみ。喜びと苦しみ。そうした区別を、限りなく相対化してみせる。フモアとは、このしんどい世界に対してあえて取る、そんな芸術上の「構え」のことなのだ。

第4交響曲のいたるところに、フモアは認められるが、分かりやすいのはソプラノ独唱が加わる第4楽章。ドイツ語民謡詩集、『少年の不思議な角笛』から採られたその詩の、第4連をみてみよう。

「地上にこんな音楽はないでしょう／この音楽には かなわないはず／一万一千もの乙女たちが／踊りだしたりするのですから／聖ウルスラさまも それをみて微笑んでいらっしゃる」

ウルスラが、かつて一万一千の乙女らに何を命じ、彼女らがどんな悲惨をなめざるを得なかったか。それについては、

歌詞対訳につけた注をご覧いただきたいが、そんな人々が、ここでは嬉しげに踊ったりしているのだ。

そしてこの交響曲は、創作の出発点を、ほかでもないこの第4楽章に負っている。

この楽章、じつは旧作「フモレスケ」(フモアの世界)という曲集からの転用で、そこでは「天国の暮らし」と題されていた。マーラーがハンブルクの歌劇場監督を務めていた頃、1892年の仕事である。これを第4楽章にすえ、先行する3楽章を新たに作り、できあがったのが第4交響曲であった。本作がトロンボーンとチューバを欠いているのは、「天国の暮らし」の楽器編成に合わせた結果だったのだ。各楽章の音楽素材(主題)も、その多くがこの元曲に関連している。

完成は1901年1月。マーラーが晴れてウィーン宮廷歌劇場の音楽監督に就いてから、2年と3か月が経っていた。

第1楽章 落ち着いて。急がずに。本当にくつろいだ感じで。4/4拍子 始まったかと思ったらすぐに消える、不思議な笛と鈴の音で開始(鈴の連打は、第4楽章にも出てくる)。あとは小唄のような平易な旋律が続く、古典派のソナチネさながらだが、そのうちドンチャン騒ぎが

始まる。フモアのあべこべの世界。

第2楽章 くつろいだ動きで。せかせかせしないで。3/8拍子 挿入部(トリオ)2つをとともなう、田舎風の舞曲レントラー。通常とは異なる調弦(スコルダトゥーラ)による不気味なヴァイオリン・ソロがつきまとい、全体は「死神の踊り」といった雰囲気。

第3楽章 安らぎに満ちて。4/4(一部3/4)拍子 「深い悲しみをいだきながら涙を浮かべるようにして笑っていた母親の顔が思い浮かぶ」とマーラーが述べた音楽。涙と笑みが同居するのも、フモアならではの。変奏曲のかたちで書かれている。クライマックスでは、第1楽章の旋律(トランペット)と、きたる第4楽章の冒頭旋律(ホルン)が交差する。

第4楽章 きわめて心地よく。4/4拍子 冒頭クラリネットが奏でる旋律の、どこかヨーデルを思わせるのどかさ、折にふれてシャンシャンと鳴る、鈴を伴った喧噪との交差。やはりフモアの世界である。

[楽器編成] ソプラノ独唱、フルート4(3番、4番はピッコロ持ち替え)、オーボエ3(3番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット3(2番はEs)、クラリネット持ち替え、3番はバス・クラリネット持ち替え)、ファゴット3(3番はコントラファゴット持ち替え)、ホルン4、トランペット3、ティンパニ、鈴、グロックンシュピール、トライアングル、シンバル、ハープ、弦楽5部

ふなき・あつや/音楽評論家。1967年生まれ。「読売新聞」で音楽評を、Music Birdなどでクラシック音楽番組の案内役を担当。雑誌等でも執筆。東京藝術大学他でドイツ語講師。共著に『魅惑のオペラ・特別版:ニーベルングの指環』(全4巻、小学館)、共訳書に『アドルフ 音楽・メディア論集』(平凡社)。

マラー 交響曲 第4番 ト長調より 第4楽章 歌詞対訳

対訳・注＝船木 篤也

Wir genießen die himmlischen Freuden, ここで味わうのは 天上のよろこび
 Drum tun wir das Irdische meiden, 地上のあれこれに 煩わされたりはしない
 Kein weltlich Getümmel 世の中の雑音など
 Hört man nicht im Himmel! ここ天国には これっぽっちも聞こえてこない
 Lebt alles in sanfter Ruh'! ものみな全てが とても安らかに憩っている
 Wir führen ein englisches Leben! なんとんでも 天使のいる暮らしだからね
 Sind dennoch ganz lustig daneben! でも おもいきり楽しくやっているよ
 Wir führen ein englisches Leben! なんとんでも 天使のいる暮らしだからね
 Wir tanzen und springen, 踊っては とんで
 Wir hüpfen und singen! 跳ねては うたう
 Sankt Peter im Himmel sieht zu! 聖ペテロさまが こちらをじっと見ている

Johannes das Lämmlein auslasset, ヨハネさまが 例の子羊をお放しになる
 Der Metzger Herodes drauf passet! 殺し屋ヘロデが それを狙ってる
 Wir führen ein geduldig's, おとなしい なんにもしらない
 Unschuldig's, geduldig's, おとなしい かわいい子羊を
 Ein liebliches Lämmlein zu Tod! みんなして殺すんだ
 Sankt Lucas den Ochsen tät schlachten 聖ルカさまが 雄牛をうちのめす
 Ohn' einig's Bedenken und Achten, 気にとめる様子など まるでなし
 Der Wein kost' kein Heller ワインを飲むにも 飲み代いらす
 Im himmlischen Keller, なんとんでもここは天国食堂
 Die Englein, die backen das Brot. パンは天使たちが焼いてくれる

Gut' Kräuter von allerhand Arten, おいしいお野菜が いろいろ
 Die wachsen im himmlischen Garten! 天国の庭には 育つんだ
 Gut' Spargel, Fisolen おいしいアスパラに インゲン
 Und was wir nur wollen! 欲しいものなら なんでも
 Ganze Schüsseln voll sind uns bereit! ボウルいっぱい頂ける

Gut Äpfel, gut' Birn' und gut' Trauben! おいしいリンゴに おいしいナシ それからブドウも
 Die Gärtner, die alles erlauben! お庭係りが なんでもかなえてくれる
 Willst Rehbock, willst Hasen, ノロジカやウサギのお肉がよければ
 Auf offener Straßen おもてに出ればいい
 Sie laufen herbei! 向こうから飛んでくるんだから
 Sollt' ein Fasttag etwa kommen, それのご精進の日だったら
 Alle Fische gleich mit Freuden いろんなお魚たちが それはもう嬉しそうに
 angeschwommen! わんさと来るから 大丈夫
 Dort läuft schon Sankt Peter ほらもうあそこに 聖ペテロさまが
 Mit Netz und mit Köder 網と餌をもって
 Zum himmlischen Weiher hinein. 天国のお池に お入りだよ
 Sankt Martha die Köchin muß sein. お料理係りは もちろん聖マルタさまだ

Kein' Musik ist ja nicht auf Erden, 地上にこんな音楽はないでしょう
 Die uns'rer verglichen kann werden. ここの音楽には かなわないはず
 Elftausend Jungfrauen 一万一千もの乙女たちが
 Zu tanzen sich trauen! 踊りだしたりするのですから
 Sankt Ursula selbst dazu lacht! 聖ウルスラさまも それをみて微笑んでいらっしやる
 Kein Musik ist ja nicht auf Erden, 地上にこんな音楽はないでしょう
 die unsrer verglichen kann werden. ここの音楽には かなわないはず
 Cäcilia mit ihren Verwandten チェチャーリアさまと そのお仲間たちは
 Sind treffliche Hofmusikanten! とても秀でた 宮廷楽士
 Die englischen Stimmen 天使たちの声をきくと
 Ermuntern die Sinnen, 体じゅうが よみがえるよう
 Daß alles für Freuden erwacht. こうして ものみなすべてが よろこびに目覚めるのです

アヒム・フォン・アルニム(1781-1831) & クレメンス・ブレンターノ(1778-1842) 編『少年の不思議な角笛』より「天国はヴァイオリンでいっぱい——バイエルン民謡」(マラーによる若干のカットと変更あり)

《対訳注》

ペテロ(聖):ガリラヤ湖の漁師シモン・ペテロは、12使徒の筆頭格。ユダヤ大司祭の下役に対してイエスを「知らない」と偽証したが、後に布教活動を熱心に行った。皇帝ネロの時代(64年頃)にローマで殉教したといわれる。「天国の扉の番人」として信仰を集める。

ヨハネ(洗礼者・聖):紀元後27年頃からユダヤの荒野で説教を始め、ヨルダン川で信奉者たちに洗礼を施した。イエスもその洗礼を受けた一人であり、イエスを「神の子羊」と呼んだのは、このヨハネである。

ヘロデ(大王):紀元前37年から後4年まで、エルサレムに王朝を築きパレスチナのユダヤ民族を支配。前代王朝を築いたハスモン家の影におびえ、その一族を暗殺した。ただし、幼子イエスの抹殺を目的にベツレヘムで幼児を虐殺したという話は、史実でないと言われる。

ルカ(聖):「ルカによる福音書」の作者。ギリシア出身とみられる。師パウロの伝道旅行に随伴。師から「我らの愛する医者」と呼

ばれたが、後の伝承では画家であったともいわれる。「羽の生えた子牛」がシンボル。

マルタ:ベタニアのマリヤの姉。弟にラザロがいる。ルカ書によれば、イエスを迎えた際、妹マリヤが主の言葉に聞き入るあいだ、もっぱら接待に心をくだいたという。ヨハネ書にも、マリヤがイエスの足に塗油するあいだ給仕役に回っていた、とある。

ウルスラ(聖):ブリタニア王の娘。4世紀頃、1万1千人の処女らを侍らせ、ケルン、バーゼル経由で、ローマに巡礼。ケルンに戻ったところで異教徒フン族に襲われた。服従よりも死を選ぶべしと侍女らを諭し、自らも殉教したという。

チェチーリア(聖):2、3世紀の人物。異教徒だった夫とその兄弟を改宗させ、その2人が殉教した後に自らも殉教したと伝えられる。9世紀に遺体に移された場所に、サンタ・チェチーリア教会(ローマ)が建てられた。オルガンと教会音楽の守護聖人とされている。